

〔書言字考節用集時二候〕幾日イチジツ一日ハチジツ輻フツ並ヒト一イツ半日ハンジツ

〔和爾雅歳時〕一輻フツ稱ヒト一日イチジツ爲ナリ一輻フツ按ヒト老子ノ云ハク三十ニ一ニ奠イ世ノ記ニ所謂ニ堯ノ庭ニ生ル黃ノ英ノ之ノ說ナリ

〔南留別志三〕一ふつかみかよかなどのか文字は箇なり、ふつかのひみかの日などいふ事を、日を略しつれば、日の字の訓をかといふやうなり、

〔倭訓栞前編六〕か 日をよむは二日三日の類也、日本紀古今集にいくつかの日と書しは、かさね辭也、かば明らかなるをいふ詞也、かすがを春日と書も亦同じ、

〔古事記傳十三〕八日は略中耶加と訓べし、略中さて此フカ二日三日八日カカ加は、日數を云言にて、彼建命御歌の迦賀那倍氏も、日々並而にて、日數を並べ計ふるを云なり、十日などのカ、加は、日數を云言にて、彼建命

はし云る言にて、氣は、經、日數の長きを、此記又万葉の歌に、多く氣長と云、又毎日、朝爾食爾と多

くよめる食は借字なり氣是なり、さてその朝爾食爾を、或は朝爾日爾ともよめるを以て、氣は日數なる

ことを思ひ定めよ、かくて氣は來經の切まりたるなり、來經と云ことは、倭建命段の歌に見えたり、なほ彼處傳九十七の廿七に委く云べし、されば二日三日など云は、二來經三來經と云ことなり、師説此

加を數の略にて、七日は七數、八日は八數と云ことなり、故に七日の日八日の日とも云りと云れしは、わるし、若數と云言ならば、日にのみはかぎらで、何の數にも云べきに、他には例なくて、只日

數にのみ云るは、日八日、且七數八數など、七來經の日と煩しく、さるること有べく、かあり思すなむ、又七日の日八日、日八日、且七數八數など、七來經の日と煩しく、さるること有べく、かあり

得ず、凡て二日より以上は、伊久加と云を、一日のみは、比止加とは云ぬは、いかなる故にか、未思加と云べきを、多を都那を奴と轉し、云は、たし、さて日數を計へて、幾日と云には、夜も其中にこも

れるを、此の如く八日八夜など、分て云も、古語の文なり、此は八日の間、夜も晝もと云意ならむ詞なるば、其意無、鎮火祭祝詞にも、夜七夜晝七日下元々集に引るに、夜とあるを用ふべし、山城風

土記にも、神集々而、七日七夜樂遊とあり、さて此の八も、例の彌の意にて、たゞ幾日もと云意か、又正しく八日八夜にも有べし、